

|             |   |
|-------------|---|
| Title       | <批評・紹介>「漢三國六朝紀年鏡圖説」梅原末治編著   |
| Author(s)   | 眞島, 行雄  |
| Citation    | 東洋史研究 (1944), 8(5-6): 339-340   |
| Issue Date  | 1944-03-15  |
| URL         | <a href="http://dx.doi.org/10.14989/145805">http://dx.doi.org/10.14989/145805</a> |
| Right       |   |
| Type        | Journal Article   |
| Textversion | publisher   |

## 批評・紹介

### 「漢三國六朝紀年鏡圖說」

梅原末治 編著

昭和十八年五月 京都桑名文星堂發行

本文一五九頁・圖版七四葉・挿圖九

定價 貳拾圓

本書は京大文學部考古學教室に於ける東亞關係遺品資料蒐集の質的並びに量的收獲の向上に伴ひ、それら自體の整理統合の必要と、更にそれらを整理統合する事によつて、新たな發掘調査による收獲遺品の資料的價値をより充分に發揮せしむる基準たらしむる目的を以て、順次世に問はれんとする『考古學資料叢刊』の第一冊を爲すものであり、兼ねて濱田博士無き後の困難なる教室の處理に當つて力を至されたる羽田博士の還暦の壽に捧げられたるものである。

偕て、本書は先づ『序說』に於て、支那・本邦並びに歐米學者の支那鏡鑑學、就中紀年鏡に對する學說の進展を批判的に概述して、本書がそれらに對して占むる自らの位置を示し、次で『各說』に於て、漢代より六朝末に至る紀年銘ある古鏡を逐年載録し、その一々に對し形態・文様・紀年等あらゆる角度より精査嚴密なる考古學的考察を加へて累述せられてある。集録紀年鏡總計百三十餘面、その一々に就て、圖版の併録せられてあ

る事は、「物自體に即する事」が研究方法に於て第一義的に要請せられる考古學の學的性格に照らして、その至らざるなき考察と共に、資料集としての本書の期する所を十二分に包含・發揮してゐると言ふ可きであらう。更に『總說』に於ては、紀年鏡を通じて究められたる鏡鑑沿革に關する綜括的考察——紀年鏡の示す確實が年代觀を基準として、是に「様式學的」並びに「類型學的」序列を與へ、以て爾餘の鏡式の年代推定の標準を指示すると共に、紀年鏡の銘文・文様等の中に自ら反映せしめられてゐる歴史的諸現象の考察に極めて示唆に富める筆を進められ、最後に『支那紀年鏡の贋作品に就いて』なる論攻を附録せられて編著者が紀年鏡研究途上に遭遇せられたる贋作品を例示して、鑑鏡學延いては近時の考古學研究者のともすると陥り勝ちなる研究方法の機械化・法式化に對して著者自身の經驗より警告せらるゝ所あると共に、考古學研究方法の第一義性を強調せられて居る。

以上が本書の概要であるが、淺薄なる考古學的知見を以て、而も限られたる時間的餘裕と紙面とを以てして編著者積年の研礎を傾けられたる本書の概要を盡し得たなどは素より思ひも及ばざる所であり、以上の雜駁なる紹介によつて、却つて本書の價値を低めざりしやを怖るゝものである。斯る自覺の下に更に所感を述ぶる如きは、蛇足たる事萬々承知ではあるが、それなりに感得せる點を取て些か附記するならば、世上一般の資料集と銘うつものが、往々にして只單なる資料の斷片的排列に止

まり、一貫せる歸納的考察の加へられざるが爲めに、ともすると一部史家の考古學的體系を無視せる恣意自用なる摘出引用を來し易からしむる一方、初心者にとりてはそれら斷片的資料の中に體系を把握せんとするは極めて困難であり、それへの努力は屢々當を失せるものとなり終せる可能性強く、更に又一般人には興味索然たる存在としてのみ止まり、一般的關心と有志者の廣汎なる協力を特に必要とする考古學にとつて、却つて對社會的に自ら溝を深むるの逆効果を齎しつつあるやに感得せらるゝものすらあるに對し、獨り本書は『各説』に於ける個別資料の檢討に加ふるに、それらを總括一貫せる歸納的論攷たる『總説』を以てして、從來の資料集に隨伴せる如上の缺陷を補正して餘す所なく、本書の構成又、『序説』より以下些かの理論的飛躍、體系的間隙を窺はしむるものなく首尾一貫、堂々の展開を示して資料集にして只單なる資料集に止らず、過去二十餘年に亙る支那古鏡鑑沿革考の樹立に對する本邦學者の努力は、今や本書の示す基準に照らしていよく完成の域に達したものと云ふべく、所謂鏡鑑學の體系樹立に對して本書は殆ど決定的な意義を有するものと言ふべきであらう。ともあれ體系と云ひ理論と云ふも一朝一夕にして成るものではなく、本書を通じて窺ひ得られる如く、編著者が既往の諸學說の粹果の批判的攝取と、更に何よりも關係資料の全般に亙り、その個々に即せる實證的努力の營々三十餘年の辛苦の結晶としてのみ初めて本書が世に問はれ、今かうして机上にある事を惟ふ時、編著者の實證

性に徹せる高邁なる學者的良心に對し、自ら頭の垂れ頰傳ふものあるを覺えるのである。個々に即するの實證的努力の後に、個々の中より抽象歸納せられてこそ、初めて體系であり、理論であり、歴史であり得るのであつて、そのみが普遍性を持ち得るものであるにも係らず、ともすると若干の斷片的な知識を、只單なる「思ひ付き」の似非理論の糸につなぎ止めて、表題のみ徒らに仰々しき羊頭肉肉的論文をものして得々たる自稱大家連の剩へ出版インフレの浪に乗つて、それを世に問ふブツクメーカー的傾向の今や滔々として世を蔽ふやの觀ある時——勿論、それらは、「時」が絶對的な批判者として、やがてうたかたの如く消え失すべき存在に過ぎぬとは謂へ——、些かでも後進を毒し學問を冒瀆せる點に對し、本書の刊行は、それ自體無言の批判と抗議とを代辯するものであり、體系的表現への魅惑の餘りベダンティックなポーズを身につけんと焦慮しつつあるかに見える一部新進學徒への良き反省の手だてともなるであらう。「時」がやがて本書に「古典」としての自らの位置を與へるであらう事を、私は此處に斷言してはゞからぬものである。幸に編著者の一層の健康と「叢刊」の續刊とを祈つて、此の貧しき紹介の筆を擱く。(眞島行雄)

### 日鮮神話傳説の研究 三品彰英著

昭和十八年六月 柳原書店刊  
A 5 版三〇〇頁 定價參圓九拾錢